タイトル：平成 23（2011）年度　教育セミナー
日時：平成 23 年 9 月 17 日（土）～20 日（火）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究　3 階　マルチメディア会議室（304）

「パレスチナにおける動員構造の検討――指導者層と動員主体から見るインティファーダ」
鈴木　啓之（東京大学大学院修士課程）

2010 年度に引き続き、本年度も「中東☆イスラーム教育セミナー」（2011 年 9 月 17 日～20 日）に参加させて頂いた。先生方と受講生による大学およびディシプリンを超えた交流の場として、昨年に劣らず意義のある参加となった。以下では、セミナーのなかで特に個人的に関心を抱いた事柄について手短に述べる。

【思想研究から現状を見る危険性【】
飯塚正人先生のご報告は、思想研究の成果を直接的に現状分析に当てはめることの危険性を指摘するものであった。決して常識を見失わず、「単一の思想」とは必ずしも一致しない「多様な現状」に目を向ける必要性が強く感じられた。これは、イスラーム思想を掲げる組織や団体が増加する今日においては、特に重要な指摘であった。

【地域研究と国民国家】
中央ユーラシア研究に関してご報告頂いた小松久男先生には、個人的な関心として、地域に横たわる国境に研究者としてどのように取り組むべきかを質問する機会を得た。「国境を意識しているのはむしろ現地の人々ではないか」とのご回答からは、現地の視点に即した研究の必然性と、だからこそ国境を越えた研究の必要性の双方において示唆を得た。

【フィールド調査と資料精読】
鷹木恵子先生には、フィールド調査を基礎とした「意味の読み解き」に関してご報告を頂いた。長年フィールドワークを行ってきたチュニジアでの「ジャスミン革命」に強烈な衝撃を受け、茫然自失のような状態で向かった現地調査で村単位での「革命」の姿を観察された過程を「意味の網目を紡ぐ」と表現された報告は感動的ですらあった。
一方、高松洋一先生には、資料の精読による事実追求の在り方を、自らの研究成果（『豊穣なるエジプト』）を例に示して頂いた。石版画につけられた説明文の訳出に際して、その人物の出自、版画作成者との関係、エジプト訪問の実態、内容の正誤、引用の有無に至るまでの膨大な調査の過程に大変刺激を受けた。
上記 2 つのご報告から、フィールドで出会った「意味」を読み解く重要性を強く認識するとともに、綿密な資料精読および資料批判から膨大な情報を引き出す過程に感銘を受けた。二者択一の選択肢としてではなく、それぞれのアプローチ方法を未熟ながらも自らの研究に生かしていければと強く思った。

【受講生発表】

初日に自らの研究に関して「パレスチナにおける動員構造の検討」と題して発表する機会を頂き、先生方から非常に示唆的な質問やコメントを数多く頂くことができた。本セミナーを企画、運営された先生方、ならびに昨年と変わらず資料の準備や会場の設営などで大変お世話になった事務局の千葉淑子さんに深く感謝申し上げる。